様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２７２５

研究課題名（和文）江戸・明治期日朝往復ハングル書簡類データベースの構築

研究課題名（英文）Construction of a database of Hangul letters exchanged between Japan and Korea during the Edo and Meiji eras

研究代表者
岸田　文隆（KISHIDA, Fumitaka）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：３０２５１８７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：江戸中期から明治初期にかけて分布している日朝往復ハングル書簡類を網羅的に収集し、翻刻・和訳・文献言語学的考察を付したデータベースを構築することを企図した。日朝往復ハングル書簡類は、従来公開がなされていなかった等の理由により、その全貌を把握することが困難であったが、近年の資料公開の機運に乗じ、網羅的な調査・分析を企図したものである。具体的には、長崎県対馬歴史研究センター、韓国国史編纂委員会などに所蔵される対馬宗家文庫ハングル書簡類や、対馬鍵屋歴史館に所蔵される「書状集」、「片紙集」などのハングル書簡集を収集しデータベースを作成した。これら諸資料には従来学界未見のものがいくつか含まれている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で構築したデータベースは、従来、解読が困難なため他の研究者が利用できなかった資料や、存在すら知られていなかった資料・閲覧調査が困難であった資料を含んでおり、朝鮮語史、日本の朝鮮語学史、日朝関係史などの研究に、新たな情報を提供するものであり、それら研究の進展に役立つものである。

研究成果の概要（英文）：The study aimed to build a database by comprehensively collecting Hangul letters exchanged between Japan and Korea from the middle of the Edo period to the early Meiji period. Although it was difficult to grasp the full picture of the Hangul letters due to reasons such as not being disclosed in the past, it was designed to conduct a comprehensive investigation and analysis by taking advantage of the recent disclosure of them. Specifically, the database was created by collecting Hangul letters of Tsushima Souke Bunko, which are owned by Nagasaki Prefectural Research Center for History of Tsushima and National Institute of Korean History, as well as Hangul letters collections owned by Tsushima Kagiya History Museum. Some of these materials were previously unknown to academia.

研究分野：朝鮮語史

キーワード：対馬　ハングル書簡　江戸時代　朝鮮語学書　小田幾五郎　漂流民　倭館　朝鮮語通詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

江戸・明治期、日朝間の外交現場において、情報伝達は多くの場合朝鮮語によってなされたと推測されるが、その際実際にどのような朝鮮語がやりとりされていたのかを具体的に示す資料は多くはない。それは、コミュニケーションの手段たる朝鮮語自体はほとんど記録されることなく、朝鮮語を介して得られた情報だけが和文や漢文で記録される場合が大半であったからである。日朝往復ハングル書簡類として学界に知られたものは、かつては、長正統(1978)によって紹介された８通の倭学訳官のハングル書簡類がすべてであった（文献１）。それは、和文や漢文の資料に比して、ハングルで記録された資料はそもそも総数が少ないという事情によるものではあるが、資料の公開が進んでいなかったという状況もその一因であったと思考する。

ところで、近年に至って資料公開の機運が盛り上がり、如上の状況は一変した。まず、ながらく未整理状態であった対馬歴史民俗資料館（現長崎県対馬歴史研究センター）の宗家文書一紙物資料が整理・公開され（文献２、３）、新たな日朝往復ハングル書簡類が発見された。総 112 通に達するこれらのハングル書簡類は、1760 年から 1831 年にかけて日朝間に往復したもので、当時日朝間で如何なる言語がやりとりされていたかを如実に伝える好個の資料である。研究代表者は、その重要性にいち早く着目し、調査・研究に従事したが（文献４、５、６、７）、本研究は、まさにその延長線上に位置するものである。

対馬歴史民俗資料館所蔵のハングル書簡類を調査する過程で、研究代表者は関連資料の伝存状況一般についても調査したが、その結果、日朝往復ハングル書簡類は、対馬歴史民俗資料館のもの以外にもなお多数の伝存するものがあり、江戸中期から明治初期にかけて、現物、あるいは、記録類や語学書等の二次資料に収録された形で、伝わっていること、その数は時代が下るほど多くなることが確認された。

さらに近年資料公開の機運は、公的機関のみならず、個人蔵の資料にまで及びつつある。江戸後期に活躍した朝鮮語大通詞小田幾五郎の後裔たる大浦家には大量の朝鮮語学書類とともに、「書簡輯」「書状録」「書状集」等の日朝往復ハングル書簡類を収めた書籍類が伝わることが知られているが、大浦家当主により設立された対馬鍵屋歴史館の主管のもと、従来未公開であったそれら貴重資料が順次公開されつつあることは、研究の好機であると言わねばならない。

２．研究の目的

本研究においては、如上の研究状況に鑑み、日朝往復ハングル書簡類を、可能な限り網羅的に収集・分析し、朝鮮語史・日朝関係史等の研究に有用なデータベースを構築することを企図した。

３．研究の方法

本研究において は、以下のすでに存在が明らかになっている日朝往復ハングル書簡類の既存資料の収集とデータベース化を進めるとともに、いまだ知られていない新資料の発掘をおこなった。

研究代表者が本研究開始前におこなった調査によって、その存在が把握された日朝往復ハングル書簡類の分布状況は以下のとおりである。江戸初期においては、日朝往復ハングル書簡類は見当たらないが、雨森芳洲の教育改革により対馬の朝鮮語通詞がハングルを解することができるようになったこと、朝鮮司訳院の倭学訳官の日本語能力が低下したこと、また、朝鮮国内におけるハングルの使用域が拡大しつつあったこと等の要因により、徐々に日朝間の外交現場の文書往復にもハングルが使用されるようになったと見られ、18 世紀初中葉から明治初期にかけて日朝間に往復したハングル書簡類が、伝存することが確認される。

現在確認できるその最も古いものは、薩摩苗代川伝来朝鮮語学書の一つ「韓牘集要」（京都大学文学部所蔵、1732 年成立）に収められた 63 通の書簡であろう。

江戸中期に至ると、歴史記録類にも日朝往復ハングル書簡類の写しが収録され始める。たとえば、韓国国史編纂委員会所蔵[記録類 4533]「分類紀事大綱」には、癸酉(1753)６月７日に商訳（都中）一統より差し出されたハングルの書付の写しが収録されており、慶應義塾大学所蔵「文化通信使記録（江戸書留）」には、丁卯(1807)10 月に訓導玄義洵(敬天)・別差崔昔(明遠)が久光市次郎あてに差し出したハングルの覚の写しが収録されている。

前項に述べたとおり、長崎県対馬歴史研究センターには、1760 年から 1831 年にかけて日朝間に往復した 112 通のハングル書簡類が所蔵されている。

対馬鍵屋歴史館には、ハングル書簡集の「書簡輯」「書状録」「書状集」「片紙集」が所蔵されている。

明治初期に至ると、日朝往復ハングル書簡類の数はさらに増加する。明治５年(1872)相良正樹・浦瀬裕による朝鮮開港交渉の顛末を記した「朝鮮行日記」（東京大学駒場図書館所蔵）、「韓国往復書類」（釜山市民図書館所蔵）には、50 余通のハングル書簡類が収められており、「応接類書」（釜山市民図書館所蔵）、「朝鮮事務書」（釜山市民図書館・国立公文書館所蔵）等にも随所にハングル書簡類の写しが散見される。

本研究で は、以上の既存資料の収集とデータベース化を進めるとともに、未発見資料の探索も

おこなった。

４．研究成果

前項に述べた既存資料の収集・分析とデータベース構築を以下のとおり、おこなった。

薩摩苗代川伝来朝鮮語学書の一つ「韓牘集要」の翻刻・和訳・文献学的検討データベースを構築した。

「分類紀事大綱」「朝鮮通信使記録」等の歴史記録類に収録されたハングル文書については、本研究期間に、網羅的に調査・収集をおこなうことを期したが、80%程度しか遂行することができず、全貌の把握は今後の課題となった。本研究期間中に収集できた資料のうち、「東館修理記録」所収の崔鶴齢作成ハングル書付およびその和解の翻刻・データベース作成をおこなった。

長崎県対馬歴史研究センター所蔵の 112 通のハングル書簡類については、すでに本研究前に作成してあった翻刻・和訳・文献学的検討一次データベースの精密化をはかるとともに、文献４の改訂・増補版にあたる文献８を刊行した。

対馬鍵屋歴史館所蔵のハングル書簡集「書簡輯」「書状録」「書状集」「片紙集」については、資料収集・分析につとめ、翻刻・和訳・文献学的検討一次データベースを構築した。その結果、「書状集」は、薩摩苗代川に伝来した朝鮮語学書の「韓牘集要」の一異本であること、「片紙集」は、収録されている書簡中に寛政９年(1797)８月 25 日に朝鮮の東萊竜塘浦口に漂着した異船一件に関するものがあることなどから、小田幾五郎がだいたい 1798 年頃に編纂したものと見られることなどが明らかになった。また、ハングル書簡ではないが、同歴史館所蔵の朝鮮事情書「虎説」および朝鮮語学書「交隣須知」についても収集・分析をおこなった。「虎説」は、小田幾五郎が積年の朝鮮語通詞の勤めのかたわら聞き取った朝鮮の虎に関する話を集めたものであるが、薩摩苗代川の朝鮮語学書の「漂民対話」や明治期の朝鮮語通訳官中村庄次郎が釜山草梁の語学所において朝鮮語を勉強したときの学習帳である「復文録」にあらわれる例文の来源を本書に見出すことができことから、江戸期日本の朝鮮語学書の成立過程を解明するうえで、極めて重要な資料である。また、「交隣須知」は、いわゆる増補本系諸本の祖本と考えられるもので、「交隣須知」の系統を考えるうえで、これまた重要な資料である。

明治初期の資料については、「朝鮮行日記」および「韓国往復書類」所収のハングル書簡類の翻刻・和訳・文献学的検討一次データベースを構築した

前項に述べた未発見資料の探索については、岡山県立記録資料館に所蔵される花房端連・義質関係資料中に浦瀬裕のハングル書簡[請求番号: A00005-000440]があることを発見した。また、ハングル書簡類ではないが、富山市立図書館の山田孝雄旧蔵書の中に「朝鮮口聞書」というかな表記朝鮮語の資料があるのを発見し、翻刻・文献学的検討データベースを作成した。

引用文献：

１）長正統(1978) **「倭学訳官書簡よりみた易地行聘交渉」 『史淵』**115, 95-131. **九州大学文学部**

２）対馬歴史民俗資料館編(2009) **『対馬宗家文庫史料一紙物目録』**(1)〜(3), **長崎県教育委員会**

３）対馬歴史民俗資料館編(2012) **『対馬宗家文庫史料絵図類等目録』, 長崎県教育委員会**

４）対馬歴史民俗資料館編(2015) **『対馬宗家文書史料　朝鮮訳官発給ハングル書簡調査報告書』, 長崎県教育委員会**

５）岸田文隆(2015) **「対馬宗家文書ハングル書簡類について―報告書の刊行を契機として―」『朝鮮学報』**237, **朝鮮学会**

６）岸田文隆(2015) **「対馬宗家文書ハングル書簡類について（原文韓国語）」 『韓国学研究論文集』**4, **中国文化大学韓国語文学系出版**

７）岸田文隆(2016) **「対馬宗家文書ハングル書簡類について―今までの成果とこれからの課題―（原文韓国語）」 『語文学論叢』**35, **国民大学校語文学研究所**

８）松原孝俊・岸田文隆・北川英一・許秀美・金京美・金周弼・金徳珍・金東哲・権洙用・黄文煥・小西敏夫・酒井裕美・酒井雅代・趙堈熙・鄭丞惠・中野等・藤川貴仁・古川祐貴・朴真完・**山口華代・横山恭子・四辻義仁・梁興淑**(2018)**『朝鮮通信使易地聘礼交渉の舞台裏―対馬宗家文庫ハングル書簡から読み解く』(九州大学韓国研究センター叢書** 3) **九州大学出版会）**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岸田文隆	４．巻 10
２．論文標題 「鍵屋歴史館所蔵「書状集」について －薩摩苗代川伝来朝鮮語学書「韓牘集要」との比較－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 譯學gwa 譯學書	６．最初と最後の頁 55-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸田文隆	４．巻 CSEL 24
２．論文標題 「対馬鍵屋歴史館所蔵ハングル書簡集「片紙集」の成立年について」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『ユーラシア諸言語の動態 Ⅳ －言語接触・混成言語・言語生態－』（Dynamics in Eurasian Languages Ⅳ － Language Contact, Mixed Language and Linguistic Ecology －	６．最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸田文隆	４．巻 21
２．論文標題 富山市立図書館山田文庫所蔵「朝鮮口聞書」解題ならびに翻刻	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『ユーラシア諸言語の動態Ⅲ　－言語の多様性と類型と混成言語－』CSEL21	６．最初と最後の頁 21-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岸田文隆	４．巻 43
２．論文標題 江戸時代日朝往復ハングル文書の分布	５．発行年 2018年
３．雑誌名 比較日本学	６．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31634/cjs.2018.43.021	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 岸田文隆
2．発表標題 「鍵屋歴史館所蔵「書状集」について ―薩摩苗代川伝来朝鮮語学書「韓牘集要」の淵源―」
3．学会等名 第13次国際訳学書学会国際学術会議（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 岸田文隆
2．発表標題 朝鮮語大通詞小田幾五郎編「虎説」と江戸期朝鮮語学書
3．学会等名 第12次国際訳学書学会国際学術会議（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 岸田文隆
2．発表標題 対馬の朝鮮語学
3．学会等名 国際訳学書学会第11回国際学術会議「東アジアの訳学政策」（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 岸田文隆
2．発表標題 「江戸時代日朝往復ハングル文書の分布」
3．学会等名 漢陽大学日本学国際比較研究所国際学術シンポジウム「韓国における日本研究と日本における韓国研究」（大韓民国）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 岸田文隆
２．発表標題 倭学訳官崔[王冏]（伯玉）とそのハングル書簡
３．学会等名 成均館大学東ASIA学術院HK研究所主催国際学術会議「東亜的私文書研究」（大韓民国）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 藤本幸夫(序)・岸田文隆(解題)	４．発行年 2023年
２．出版社 対馬鍵屋歴史館	５．総ページ数 27
３．書名 『交隣須知 / 小田幾五郎修正増補（解題篇)』	

１．著者名 岸田文隆	４．発行年 2022年
２．出版社 対馬鍵屋歴史館	５．総ページ数 48
３．書名 （鍵屋歴史館所蔵 朝鮮語大通詞小田幾五郎編）虎説【解題・翻刻・現代語訳】	

１．著者名 松原孝俊・岸田文隆編	４．発行年 2018年
２．出版社 九州大学出版会	５．総ページ数 457
３．書名 朝鮮通信使易地聘礼交渉の舞台裏―対馬宗家文庫ハングル書簡から読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関